

実践的学習を取り入れた「乳児保育」についての試み 2

— 学生の協働の学び —

永田恵実子¹⁾ 木村映子²⁾ 三條美和²⁾

Consider incorporating practical learning about the “Baby Care” 2

— Learning of a student collaboration —

はじめに

静岡英和大学では、2011年6月より概ね月1回のペースで「学生による子育て親子広場あちょぼ（以下『あちょぼ』と記す）」を開催してきた。学内を地域親子（主に3歳未満児と保護者）の子育て支援の場として解放したのである。参加家族は毎回概ね90家族にのぼり、親子と学生、教員を合わせると合計参加人数は250人を超える大規模な子育て支援事業となった。

この取り組みは、保育者を目指す学生たちにとっても、大勢の地域親子と接する経験を積むことになる非常に有意義な取り組みである。親子に関わることで、子どもの発達、保育内容の立案、保育技術の演習、親子の日々生活の理解など身をもって学べる保育実践の場となる。

昨年行った先行研究では、保育士養成課程の科目「保育の内容・方法に関する科目」として位置づけられる、「乳児保育」を、保育実践『あちょぼ』で学ぶことでの学生の学習の理解とその成果について発表した¹⁾。

さらに、今年度も継続して学生たちが『あちょぼ』を実践した結果、学生全体のコミュニケーション力の向上に気づいた。それは、学生たちが『あちょぼ』を運営するという同じ目的のために、対等の立場で協力し共に働く『協働』の動きが非常に活発になっていったとも考えられた。

本稿では、『あちょぼ』を企画運営する中での様々な学生の「協働」に注目し、その成果について報告する。

1. 研究の目的

保育の場で必要とされる協働は、学生の保育実践力の向上が見込め「乳児保育」でも学ぶべき重要な課題である。したがって、学生の協働の成果をまとめることには非常に意義がある。

今回は、『あちょぼ』での「協働」に視点をおき学生の気づきからの学びをまとめる。

1) 静岡英和学院大学

2) 社会福祉法人大原福祉会大原保育園

2. 研究方法

取り組みの期間は3か月間(2013年5月～2012年7月まで)とし、学生の取り組みの記録を元に、実践学習の成果について報告する。

(1) 実践的学習の流れ

1) 学習時間の活用方法

学習の流れは、以下のように、大学での『あちょぼ』を利用し、学生の担当場所を5か所(図の『あちょぼ』は、3回(〈5月27日〉、〈6月17日〉、〈7月22日〉)を含む図2参照)に分けた。科目「乳児保育」での取り組みの流れ(図3参照)は、①計画②準備③実践学習④振り返り⑤改善、次回の実践に生かす学習方法とし、これを3回繰り返す、前期3か月(5～7月)15回授業を行った。なお、学生の保育実践の役割分担場所別の記録から学びの経過に分けて分析した。

2) 学生の役割分担

「乳児保育」受講学生は、36人(1年生3人、2年生23人、3年生10人)。担当コーナーを5種類(図1参照)に分け、遊具(滑り台、ボールプール)、玩具(車、ままごと・積み木・ブロック、乳児玩具等)に細分化し担当させた。

図1 学生の役割分担場所



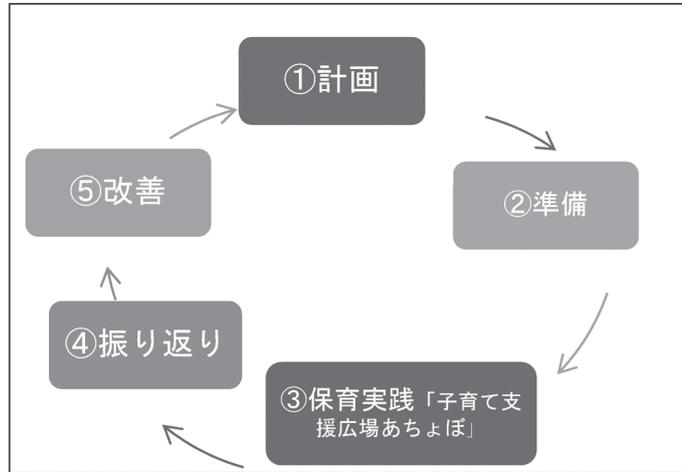
3. 結果

ここでは、乳児保育の学生の3か月の記録から学生の役割分担場所別(図1)と実践学習取り組みの流れ(図3)に従い学生の「協働」に視点をおき記録から抜粋した。

図 2 2013 年度版『あちよぼ』チラシ



図 3 実践学習での取り組みの流れ



(1) 受付担当

5月

① 計画

- ・グループで環境への配慮について、清潔、子どもに危険がないようにすること。とくに、当日は清潔感のある髪形（長い髪は縛る等）、服装（エプロン、名札、スニーカー、ハイヒールは危険、ズボン、ミニスカートは適さない）。また、受付の親への配慮として、最初に接する場所なので、①親子におどおどしないで「おはようございます」と笑顔で挨拶、親への丁寧な言葉使いを心掛ける②受付手順に従って分かりやすく説明する③親が書類を書く際に、子どもを見守ること、④パネルシアターや手遊びは、学生も子どもの中に入って座って参加することの3点を確認した。

② 準備

- ・グループで受付として書類の確認、催しの流れを確認した。

③ 保育実践（5月27日）

- ・来場者が一時期に押し寄せたため、受付担当は多忙になった。親が書類を記入している間に子どもが泣き出してしまうこともあり困った。先輩が子どもに「名札の色何がいいのかな」と優しく話しかけることや親に対する言葉使いや説明の仕方などを助言された。
- ・実際に親子を目の前にすると、非常に緊張した。最初受付の仕事に戸惑ったが、回数をこなすうちに説明の方法を改善する余裕ができた。席を外すときは、みんなで声をかけ合って業務をこなした。子どもへの声のかけ方は、先輩の声を真似た。事前に、授業で先輩から段取りを聞いていたことや、グループで保護者にスムーズに書類を記入してもらう方法を話し合っていたことで安心して対応できた。

写真1 準備 2回目以降受付（書類の確認）



写真2 保育実践 初回受付（書類と案内）



④ 振り返り

- ・受付が混雑して慌ててしまったが、学生たちの明るい声で挨拶する様子を見て真似ると、子どもに話しかける余裕ができた。対応している親だけでなく、他の親たちも学生達でフォローしあった。他の学生と相談し、もう受付には人が来ないだろうと判断し、パネルシアターを観ている親子のところに援助に行った。
- ・人で混雑した受付を手順良く進める必要があったが、人が来なくなった時に、先輩に「玩具や滑り台をサポートして」と指導を受け、子どもの多いところに援助にいった。全体の様子を見て、動くことができた。言葉がけをしながら助け合う、協働をする。受付もチームワークが大切な仕事だと気づいた。
- ・受付が一段落したあとに乳児コーナーに入った。しかし、どのように子どもに話しかけていいのかわからなかった。他の学生の同じように戸惑う姿をみて、1人だけではないと安心した。
- ・受付は大変であると聞いていたためとても不安だった。しかし、始めてみると、先輩から助言をもらって進めることができた。最後に関わったお母さんの話から、「今度はお友達を誘ってこようかな」と言われた。学生たちの頑張りが伝わった気がして、すごくうれしく思った。次回は積極的に親子に接し支援をしたい。
- ・保護者が記入している時に子どもを抱っこして書きやすくしたが、子どもだけに気を取られ、親への説明がうまくできなかった。すぐに周りに支援を求めればよかった。
- ・最初は少し混み合っていたが、先輩の助言をもらい、学生同士がお互い声を掛け合ったことで、保護者を待たせることなくスムーズに受付を行うことができた。
- ・授業のため途中で抜けたが、振り返りで環境を整った写真を見ると、私が抜けた後にたくさんの学生が支援してくれていたということが分かった。

⑤ 改善

- ・準備の段階で、配布する書類がバラバラに入っていたので、事前に見直す必要があることがわかった。配布物に、持って帰ってもらうものと提出してもらう書類があるため、グループの全員で確認し理解する必要があったことが分かった。
- ・親子に笑顔で話しかけている学生をみて、笑顔の大切さを知った。また、足元のマットが浮いていると子どもの足にひっかかって転んでしまうという先輩の話から、危険性を考慮しながら、環境づくりを行うことが大切だと感じた。
- ・私自身余裕がなく、会全体の様子が理解できず不安だった。次回は他の学生がどのように動いているのかしっかり観察してみたい。
- ・アンケートは、学生がペンを持って親に直接声をかけることで回収率が上がるのではないかと思った。
- ・学生同士がコーナーでかたまって座り込んでいた。親の中に入るのが不安かもしれないが、周りを見て支援を考えることが必要だと感じた。一方で、先輩が子どもと積極的に関わっている姿が見られ、楽しそうで、すごくまいと思った。自分も積極的に話しかけてみたが、明るく接することができなかった。先輩の子どもとの関わり方を真似たいと感じた。

6月

① 計画

- ・子どもへの配慮としては、危険がないかをグループで確認した。親への配慮としては、臨機応変に動き、親子の支援の方法をみんなの姿をみて知った。前回は自分のことだけで精いっぱいだったため、周り調整しながら他のコーナーへも関わられるようにしていくように目標を立てた。
- ・笑顔で迎え入れ、子どもと目線を合わせるためにしゃがんで顔を見ることや、突然に背後から声をかけないこと、丁寧な言葉使い、親子に不快な気持ちにさせないことを確認した。
- ・初回受付と2回目以降の受付の内容の違いを具体的に話し合った。受付担当者の人数も来場者に合わせて変えていくことも相談した。

② 準備

- ・受付で書類の配布が間違い、ミスしてしまうことがあったため、グループ内で事前に書類の確認をしてからスタートさせる準備をした。出席カードのシールは季節感のあるものを選んだ。準備の段階では、グループで話し合うことが多く、事前に確認しておくことができなかった。
- ・学生全員で、子どもの足がひっかからないように、マットに隙間がないように敷き直しながら確認し、玩具やマット畳の消毒をした。

③ 保育実践（6月17日）

- 子どもに出席カードのシール貼りをさせているうちに、ネームプレートを用意していなかったことに気づき慌てて用意した。子どもの安全のため、ネームプレートは子どもの背中に付けてもらうように保護者に伝えることを先輩から聞いた。
- 参加者が200人を超え受付はごった返した。一人で2、3人の保護者に同時に説明し、慌ただしかったことがあり、説明が親に伝わっていたかどうか不安だった。
- グループ全員、当日の流れが把握できていて準備もスムーズだった。初回受付でペアをつくった。保護者に説明している間、相方が子どもを抱いていてくれた。その間に、自賠責保険の説明と書類の書き方、アンケートのお願いなど、具体的にゆっくり説明。安心してできたので、2回目の方が1人にかかる時間が短く効率的に対応できた。
- 受付の手が空き、ままごとコーナーに手伝いに行ったが、子ども同士でもの取り合いがあり、対応方法に迷った。そこには自分しかいなかったため誰にも相談できなかった。
- 受付から滑り台に手伝いにいった。担当の学生の関わりをみて、階段の方から登るように子どもと一緒に回った。受付でも子どもと関わることがうれしかった。

④ 振り返り

- 前は慌て焦ってしまったが、2回目なので落ち着いて自分の業務を進めることができた。また、周りの人たちの動きも見て動けるようになった。他の学生の親子とのやり取りの方法をみて学べた。
- 受付で母親が書類に記入している時、子どもは時間を持て余してしまい退屈しているようであった。子どもにシールを選ばせるなど楽しくする工夫が必要だと思った。また、学生の様子をみて、突然ではなく優しく笑顔でゆっくり子どもに近づくことを理解した。
- 出席カードの子どもの名前がすぐに見つけられなかったため、カードのところで親子が待たされ混雑した。先輩がやっていたように、事前に五十音順に並べ、確認しておいた方が分かりやすいと思った。

⑤ 改善

- 子どもや保護者の会話する姿を見ているだけで、入っていけなかった。次回は関わられるようにしたい。
- メンバーとの関係を深くして連携していく必要を感じた。3年生であるため、1年生や2年生にもっと積極的に話しかけていくことが大切だと感じた。
- 子ども同士のいさかいの場面の対応の方法に迷っていると、母親に家での対応方法を聞くことができた。保護者に家庭での関わりについて相談してみるといいと感じた。
- チームで様々な書類の書き方や流れについて理解した方がいい。保護者に持ち帰ってもらうものは、一人ではなく、もう一人で確認できるようペアで動くことが有効であると思った。他の学生との連携をすることによって動きが広範囲になる、と報告した。
- 前回の反省を活かし自分たちで動くことができたが、先輩の親子との関わりをみて、「こうすればいいのか」とさらに学ぶことが多かった。

7月

① 計画

- 書類の確認、誕生カードの数の確認（7月と8月分2か月分を確認）、清潔な環境、服装・髪形などの確認。ことばづかいの確認。子どもの目線、子どもの気持ちを読みとる支援を考えた。

② 準備

- 名札、受付カードのシールの準備をする際、十分な数を用意する。誕生カード（8月生まれの子どもを7月に一緒にお祝いする）を50人分確保し、学生による劇の確認をした。

③ 保育実践（7月22日）

- 当日、体調を崩し他学生に連絡した。参加したが、一人では思うように動けなかった。
- 誕生カードを配布する子どもを調べていた時、名前だけでは男女の区別がつかず困った。会場にいる30人ほどの保護者を探し、再度性別を聞くことになった。受付で男女別の記述をしてもらう必要を感じた。
- 幼稚園が夏休みに入っているため、乳児と保護者だけでなく、兄弟も一緒に参加が多かった。そのため、受付で待ってもらう人数も増え、入口周辺も混雑した。混雑して行列ができているのを見ると、受付担当の私は余計に

あたふたとしてしまった。受付で混乱していると、何度も来てくれて受付に慣れているお母さんから逆に、「ここはこうだね」と声をかけられ教えてもらった。

- 子どもに選択させることを心掛けた。①シールはどれがいい②名札の色はどれがいい③何してあそびたい、この3点は大切で他学生と確認し支援した。
- 受付から誘導をする係を初めてすることになった。不安だったが、やってみると、誘導は受付と違い、親子に挨拶ができることが分かった。受付が混んできたなら、入ることができるため、全体の動きが把握でき周りとの連携しやすいと思った。

④ 振り返り

- 受付の内容をしっかりと理解することが必要だった。担当の仕事や子どもとの関わりが十分でできなかった。体調管理をしていく必要を感じた。
- 事前に確認しあっていない点や、整理していなかった書類に混雑し、さらに作業にてこずった。確認の甘さを反省した。
- 3回目慣れてきたので、「おちついて行動する」をテーマにした。①グループでも落ち着いて考えること②学生同士で声かけをすること③全体の流れの把握ができること、などが落ち着けるための要素だと思った。
- 受付でも①子どもの相手をして保護者に十分理解できる受付作業が行えるようにする②子どもの発達段階にあった関わりをする、など大切であることが分かった。

⑤ 改善

- 受付で子どもが待つ時間に、①子どもの興味を引くものを準備する②受付と他のグループと連携し遊びに誘導できるようにする③入口のドアの開閉を把握し安全を確保する、などが大切だと思った。
- 入場人数が多いと、受付の書類が足らなくなる。初回受付から書類をもらって対応したが、準備段階から受付2か所の受付の連携の必要を感じた。
- 「おちついて」の次は「楽しむ」を目標にしたい。「楽しむ」は子どもや保護者にとってであるが、「楽しむ親子」をみて学生たちも楽しむことだと思った。
- 受付は、①説明を簡単明確にできるように練習しておく②子どもを退屈にさせない関わりをする③子どもを見ることで保護者が受付作業できるようにする、以上が非常に大切であることがわかった。

(2) 制作担当（季節〈月別〉）の制作物を親子と作成

5月

① 計画

- 当日の髪形、服装について確認しあう。

② 準備

- 制作を初めて担当したが、なにを準備するのか分からなかった。担当グループの人たちから話を聞いて実践しながら理解し、準備を進めた。
- グループでは、子どもが少ない時に学生が二人配置されたが、子どもがいない場合は声を掛け合って、足りなくなったパーツを補充する係を作った。

③ 保育実践（5月27日）

- 制作コーナーでたまご型のカードを作った。画用紙に羽、目、くちばし、足などのパーツを張り付け、ひよこを作った。最初緊張して話しかけても何も声を出してくれなかった子どもに、パーツを張るたびに、根気よく「よくできたね」と声をかけると、だんだん笑顔を見せるようになった。いろいろな色のパーツがあったので、子どもが選びやすいように子どもの目の前に見せ、「どれがいい？」と声をかけた。慣れてきて、「どこに貼ろうか？」と声をかけ、子どもが選択できるように関わった。
- 制作コーナーは、初めはあまり人が来なかったため、制作物を持って、「こういうものを作っていますよ」と親子のところへ行って呼び込みをした。そのうちに親子が制作に興味を持ってきて参加してくれた。制作コーナーに人が急に多くなったため、他のグループの人たちも手伝いに来てくれた。

④ 振り返り

- ・制作コーナーで、子どもたちにこうしなければならないという、型にはまった遊びを子どもに求めるのではなく、子どもの好きな遊び方や好きな色を使って制作する楽しさを味わうことが大事であるということ、学生たちの関わりをみて理解した。

⑤ 改善

- ・制作コーナーの目的は、親子で楽しんで作ってもらうこと、作ったものを家に持ち帰り、お家でも同じように子どもと作って遊んでもらうことである。そのため、「こうやって作らなければならない」と親子に教えるのではなく、「こんな風に作れるよ」と見せて考えてもらうことが大切であることを学んだ。

6月

① 計画

- ・子どもが作った作品に対して完成度を求めるのではなく、子どもが自由に表現できるように支援することが大切であることがわかった。また、子どもを手助けしすぎないことをグループで確認し合った。
- ・自ら積極的に行動し、相談し助け合いながら作業を行うことが大切だと理解できた。
- ・環境への配慮として、子どもの足元に危険なものはないか、壊れた玩具がないか、剥がれている壁面はないか、十分確認することを話し合った。

② 準備

- ・事前に催しの流れを説明する学生から、2つの指摘があった。①リトミックや歌遊びの際は、親子と一緒に参加すること②舞台周辺には子どもの危険がないように玩具を片づけること。とくに、担当者だけに任せ切るのではなく、みんなで確認することが大切なことが分かった。

③ 保育実践（6月17日）

- ・かたつむりの殻の台紙にオクラやニンジン、レンコンといった野菜のスタンプを子どもたちは夢中で押していた。「子どもの自由な発想に任せて欲しい」という前回の『あちょぼ』での母親の声を意識して、子どもが自発的に遊べるように見守った。
- ・開始直後、制作コーナーに子どもがいなかったため、制作に残る人と他のグループに手伝いに行く人と別れ、私は制作コーナーに残った。コーナーに来てくれた親子の中に、お兄ちゃんとまだ1歳に満たない子ども2人を連れているお母さんが、スタンプ遊びに参加していた。その際は、お母さんの目はスタンプ遊びに夢中になっているお兄ちゃんの方に集中してしまうため、私は、赤ちゃんの方を見守った。

④ 振り返り

- ・今回は、制作コーナーで野菜スタンプをしたが、野菜が苦手な子どももいることが分かった。野菜を使ったあそびで楽しんでもらい、野菜に親しませることも大事だと知った。また、子どもがしたい遊びをさせることは大切だが、何をしてもよいということではなく、他の子どもとの関係をうまく保つような支援が大切だと気づいた。

⑤ 改善

- ・前回、親から制作の説明を求められたがどう応えてよいかわからず慌てた。今回は事前に担当者に聞き、手順を伝えることができるほど内容を熟知することが大切だと分かった。

7月

① 計画

- ・ミニスカートではなく、動きやすい服装（長ズボンなど）着用することを話し合う。

② 準備

- ・制作コーナーに学生数名が手伝いに来てくれること、子どもたちで富士山をつくる遊びであることを確認しておく。絵具（写真4参照）の準備が十分か確認する。

③ 保育実践（7月22日）

- ・制作コーナーで絵の具を使って富士山を作った。2人で紙が貼ってあるボードが倒れないようにし、子どもが自分の好きなように絵の具を使って絵を描き、手形を付けたりと、自由に遊んでいる様子を見守る。

④ 振り返り

- 子どもに対して必要な点グループで確認した。①子どもが進んでできるような環境や場の雰囲気づくりをする②完成した作品に対して「上手だね。かっこいいね。かわいいね。」という声掛けをする③子どもが行動しやすいような道具の配置をする④道具の使い方の分からない子には説明し、子どもが発する言葉に反応して答える⑤その子なりの表現方法を受け止める。

写真3 準備 全員でスケジュールの確認



写真4 準備 制作（7月：富士山の絵）



⑤ 改善

- 子どもの行動をゆっくり見ていられず、口を挟んでしまうこともあったので、その子なりの表現を受け止め、褒めることが大切だと思った。子どもを見守ることは難しい。
- 制作担当学生が、人が足りていなかった車あそびに移動したことで、担当する人数が少なくなったが、他のコーナーの学生に声をかけ、支援してもらおうことができるようになってきた。学生に支援を求めることに遠慮や躊躇することは自分勝手な思いである。片づけの際、学生が全体把握し臨機応変な対応が必要だと思った。

(3) 遊具・玩具担当（親子遊び担当〈遊具：滑り台、ボールプール、玩具：車あそび、ままごと・積み木・ブロック、乳児玩具等〉）

5月

① 計画

- 先輩から、髪を縛る・動きやすい服装・丁寧な言葉遣い・衛生面に気づかうことについてなどの注意点を聞いた。全員で5月のスケジュールについて確認をした。たくさんの子どもと接して一人でも多くの保護者と関わることを目標にした。学生のステージが始まる11時ごろに遊具を片づけることがスケジュールを円滑にしていくことポイントであることを理解した。
- 積み木コーナーでは、玩具を投げてしまう子どもに注意する。全体を見回して保育することを話し合う。

② 準備

- 何をしてもよいか分からないため、みんなの動きをみて動く。先輩からの助言で、準備する量は縦にしてもつと運びやすいことを学んだ。
- 足元に物が落ちていないか、また、子どもの頭の上に物が落ちてこないかなど、周りを見ながら動き、子どもたちに危険がないように注意することを話し合った。
- グループ全員で協力して授乳室の準備（マット敷き、ポット、机の移動、看板、布団出し）を行った。お母さんが使いやすいような机の配置を話し合った。外から部屋の中が見えないようにボードを置き、お母さんが安心して授乳できる環境を作った。学生たちが協力したため、スムーズに準備できた。
- 玩具やままごと、ボールプール、滑り台の全てに消毒した。子どもたちが安全に遊び、保護者も安心して子どもと遊ぶ環境を整えること、また、他の親や学生と交流できるよう迎え入れる準備をすることの大切さを改めて感じた。準備を通して、「いよいよ明日だ。がんばろう」と意気込んだ。
- 戸外で車あそびの担当になった。このコーナーは外にあるため、当日の朝に準備することになった。乗り物コーナーの環境づくりにおいて、植木鉢を使って通路との区切りを作ることによって、子どもを危険にさらさない工夫がされていることを学んだ。

③ 保育実践（5月27日）

- 先輩たちの子どもと関わる様子を見ていると、子どもの気を引くような言葉かけや、絵本の絵を子どもに見やす

いように指さしながら問いかけるなど、様々に関わる工夫をしているのが分かった。

- ままごとは女の子の遊びというイメージがあったが、男児の方が多くあそんでいた。もっと男子学生にままごとあそびに参加して欲しいと声をかけた。
- 初めて参加した。子どもたちには「おはよう」と声をかけられたが、緊張し保護者に声をかけることができなかった。3年生が子どもを見守りながら自然と保護者とも会話をしている姿を見て、自分も関わりたいと思い、親子2人で来ている家族に話しかけることにした。しばらくして乗り物コーナーへ移動したことで緊張が解けて積極的に関われるようになった。後半になると、一緒に遊んでいる子どもだけでなく周りの子どもや保護者にも気を配れるようになり、自分自身も参加していると思えた。
- 授業があり、途中からの参加だったが、他のメンバーが段取りをつけてくれたため、素早く担当場所に溶け込むことができた。2歳の男の子が玩具の学生たちの片づけをみて一緒に片づけを始めた。
- 初めて参加して、最初はどのように保護者に話しかけるべきか分からず不安だったが、初めて参加した保護者と話す中で、「うちの子は〇〇で遊ぶの」と教えてもらい、子育ての不安や大変さを教えてもらった。最後に保護者から「ありがとう。また来月きますね」と声をかけてもらったことがうれしかった。次回はもっと密接に親子に関わろうと思った。
- 保護者に声をかけることはできたが、初めて会う子どもに対してどんな声掛けをするべきか悩んだ。また、乳児とのやり取りの仕方がわからないため、関わり続けるにはどうすべきなのか分からず、周りの学生の様子を見まわした。
- 野外の乗り物コーナー担当。最初は人がまったく来なかった。室内で遊んでから、一人二人と徐々に集まってきた。最初担当者は3人。子どもが1人になった時、担当の2人が室内に行ってしまった。その後、6～7組の親子が来た。助けを呼ぼうとしたが室内にいるため、学生に声をかけに行けなかった。今度は1人でどの子をどう見ればいいのか分からなくなった。1人の子どもを見たり全体を見渡したりして、危険のないように動こうとしたが、担当学生の臨機応変な対応をする力の大切さを感じた。
- 子どもが乗り物から立ち上がる際に転んで怪我をしてしまった。怪我をした子どもの対応について理解していなかったため、対応の仕方を担当者全員で学んでおくことの必要性を感じた。

④ 振り返り

- 本年度初めての開催だったが、学生たちの動きがスムーズで、トラブルなく取り組みを行うことができた。しかし、自分は初めての実践で積極的に動くことができなかった。わからないことはグループの人に聞きあって解決することができた。
- 積み木のコーナーでの子どもの目につくように高く積んでおくような先輩たちの工夫が、子どもの興味関心を引くということを学んだ。

写真5 準備 赤ちゃん玩具設置



写真6 保育実践 戸外で乗り物あそび



写真7 保育実践 積み木・ブロック



写真8 保育実践 駐車場で案内



- ・今回最も印象に残ったことは、様々な場面で保護者と話すことができたこと。とくに、本学卒業生の保護者と話すことができ、母親の生の声や子育ての話より近い立場の人から聞くことができ勉強になった。後日振り返りの時間に写真を見て、担当ごとに重要な役割や準備があることに気づいた。例えば、準備で玩具の一つ一つに消毒がしてあり、保護者が安心して子どもを遊ばせる工夫がしてあることに気づいた。また、写真には自分の姿も写っており、自分が乳児と関わる様子を客観的に見ることができた。乳児と接する自分は単調な動きしかできていないと感じた。事前に乳児との関わり方を学んだうえで、実践に参加すべきだと感じた。

⑤ 改善

- ・自分のことで精いっぱい、他の人の動きをみる余裕はなく、終了してから「こうやって声をかければよかった」と思うこともあった。次回もう少し余裕をもって、広い視点をもって行動できるようにするという目標ができた。
- ・保護者が子どもから目を離せる環境ができていないと感じた。大学の環境で子どもにとっての危険箇所を全員で理解することが必要である。
- ・乳児コーナーにくる子どもは、月齢により遊び方や興味をもつもの異なるため、保護者に尋ねた上で、子どもと関わる必要があると感じた。
- ・保護者アンケートの依頼のため会場でアナウンスをしたが、乳児コーナーはざわついていて、アナウンスが届かなかった。会場を一周して参加者全員に伝わるようなアナウンスをする必要であると感じた。
- ・乗り物は戸外にあるため地盤が固く怪我をしやすい。そのため、支援者は子どもにあった人数が必要であると感じた。

6月

① 計画

- ・①子どもがしたい遊びを十分させること、②一人でいる親にこそ関わるようにすること、③普段家庭では遊べない大型玩具や遊具でダイナミックにあそばせるが、危険のないように見守ること、を確認した。
- ・赤ちゃん用の玩具は、見た目楽しそうなディスプレイの配置を考える。
- ・声のかけ方を前回学んだ。今回は沢山の保護者と話す。1カ所で学生が固まってしまう。保護者アンケートの回収数の増大を目標とした。

② 準備

- ・子どもの足元にゴミや段差などをなくして危険に注意することをグループで確認した。
- ・自分の担当場所だけでなく、他の担当場所にも目を配る必要がある。

③ 保育実践（6月17日）

- ・子どもと顔見知りになった学生が、前回と同じ子どもと慣れた様子で楽しそうに積み木を積み上げていた。
- ・2回目のこともあり、前回よりも気持ちに余裕ができた。また、前回よりも積極的に親子と関わる事ができた。戸惑うことや分からないことは、他の学生に素直に申し出て、助けてもらった。
- ・子ども間の玩具の取り合いの場面が多かった。取り合う子どもへの対応が難しかった。
- ・親子側から私の顔を覚えていて声をかけてよってきてくれた。うれしかった。このことで、緊張した気持ちが薄れて親子の様子をゆっくりと見ることができた。子どもに対して、①何に興味を示すか②何が楽しみで遊びをするのか、そうした点からそれぞれの子どもをみていると、一人ひとりの子どもの特徴をみることができた。
- ・前月来た子どもは前回より素早く歩くことができていた。子どもの成長の速さを実感した。親に「早く歩けるようになりましたね」と声をかけた。お母さんと一緒に子どもの成長を確かめることができた。首が座らない月齢の子どもが、赤ちゃんコーナーで寝転がっているため、立ったり歩いたりできる子どもたちのあそぶ玩具が当たったりしないように前回より気配りできるようになってきた。自分でもそれが気づけてうれしかった。
- ・2回目のままごと担当であった。前回とは比べ物にならないほどの人数の子どもたちがままごとコーナーに来て混雑したが、前回よりも自分から親子に話しかけることができるようになった。自分でもそれが満足できた。自分の成長が見えた。
- ・遊んでいる子どもの体温が高く感じたので、看護師に伝え、窓際につれていってもらい休ませた。体調の悪い子どもの対応方法を学んだ。
- ・2回目の赤ちゃん担当。前回の実践で、子どもの目線にあわせることの大切さを知った。子どもと目を合わせることで、目線の先のもの、どこに興味があるのか、どこをみているのかが分かった。それをたよりに、声をかけることにした。

④ 振り返り

- 子どもから手に持っているものを渡されたら、お礼を言ってまたそれを返す。子どもが私に渡してくれたのは、私に興味を持ってくれたという意思表示であり、小さな出来事がやりとりの始まりだと分かった。このことは、グループで報告した。
- 他コーナーの学生から、「赤ちゃんコーナーの学生は固まりすぎだよ」と指摘を受け、学生同士で固まっていることに気づき、親子の中に入り、散らばるように動いた。母親に話かけたが、話が途中で途切れたときは、焦った。こちらから質問することで、母親側から話を振ってくれることがわかった。

写真 9 保育実践 ままごと



写真 10 保育実践 ポールプール



写真 11 保育実践乳児コーナー



- 帰りの時間になり、会場を走り回っていた子どもに「かえるよ」と親に伝えられたとたん、大泣きになってしまった。「『あちょぼ』を楽しんでくれた」と確信した。
- 今回子どもを観察して分かったことは、①歩き始めのころの子どもは、歩いてあちらこちらに動く。足元の段差などに注意しないと転びそうになってしまう。子どもが転びそうな時はすぐに支えられるように見守らなければならない②乳児は、玩具をよく口に入れてしまう。喉に通らない大きさのものを置いてあるが、衛生面にも気を付ける③子どもとうまく会話ができなくても、抱っこしたり触ったりスキンシップをするとやり取りができる。

親に対して気が付いたことは、①子どもだけ遊ばせておいて親同士の会話に夢中になってしまう人が結構いる②初めて親子二人で参加している人たちもいる。そのため、気を付けて学生が見守る必要がある。③兄弟を連れて参加している家族が多い。兄弟の年齢や月齢によって遊びの質が違うため、学生が介入し親子と十分に遊ばせることが大切である。

⑤ 改善

- 終わりの歌を決め、会の終わりをみんなに知らせる。知らせることで帰りが理解でき、会の終了、片づけがスムーズになる、とみんなで確認した。
- 乳児の担当で、様々な月齢や年齢の子どもを目の前にした。子どもと関わる前に、子どもの発達過程を理解することであると実感した。母親との関わりのはじめは、まず母親の話を聞いて、興味のある話をこちらから振ることだと感じた。

7月

① 計画

- 前月のアンケートの回収数が増えたことで、今回もハート型の風船をプレゼントに用意した。アンケート回収時に交換することを確認する。
- 子どもに話しかける時、真正面から関わってしまい、びっくりさせてしまうことがあったため、今回は、少し斜めでやさしく声をかける。また、毎回同じ親子とだけ関わらず、様々な親子と関わり、コミュニケーション方法を学ぶ。

② 準備

- ままごと担当者は、事前に丸テーブルの上にお皿やコップ、果物やケーキなどを並べ、途中から遊びに入った子どもにも楽しそうな雰囲気味わわせる。

③ 保育実践（7月22日）

- 子どもにブロックを渡すと高く積み上げていった。傍にきた子どもが、積み上げられたブロックを倒してしまい、子どもが泣き出してしまう場面もあった。2歳8か月の男児は、玩具の形を見て、「丸、四角」などの言葉を発

しながら積み上げていた。ブロックを電車と踏切に見立てて、子どもと電車ごっこをした。それを見た母親が「大型ブロックで遊べるとダイナミックになって楽しいね」と言ってくれた。

- ・6か月の男児がブロックにつかまって立とうとする姿があった。うまく立てなくて、泣き出すこともあり、見ていて焦った。横にいたお母さんは、他の人との話に夢中になって、子どもの様子を見ていなかった。成長過程に危険な場面もあり、様々な年齢の子どもの発達や親の様子を知ることが必要だった。
- ・子どもとままごとをしている時①子どもが切った野菜を手渡してくれたが、どうすればいいのかわからなかった。②子どもが遊んでいる途中に、おもちゃを他の子どもに取られてしまった。追いかけて取り返した方がいいのか分からなかった。③子どもと関わる際、「〇〇ちゃん」と子どもの名前を呼んでから関わるべきだと思った。
- ・劇が始まると学生たちが遊具を動かし、座るスペースを空けた。そこに親子が集まり、催しものを楽しんだ。片づけを2歳くらいの子子どもが手伝ってくれた。無意識に、「ありがとう」と言えた自分に驚いた。
- ・前回は母親とあまり話すことができなかつたため、今回は「話すぞ」と自ら進んで声をかけ、母親グループの中に入っていった。母親たちの話は、子どもの発達のことが中心で、気にかかっているようだった。子育てには悩みが多いと感じた。お母さんの話の中で、「子どもがかわいくってしかたがないのよ」との声を聴き、子育ては悩みもあるが楽しみも多いのだなと感じた。
- ・親子に挨拶することや、ことばをかけることを意識してみた。今回は、関わった子どもが1歳以下の子どもが多かったので、優しい視線を気にした。分からない点については、先輩がフォローしてくれた。温かいサポートがうれしかった。前回参加した親子が私を覚えてくれていて、言葉をかけてくれた。顔を覚えてくれていたことがうれしかった。
- ・音の出る玩具を好む子ども、午前中に眠くなりぐずり出す子ども、と様々いて乳児コーナーの畳敷きの意義が分かってきた。

④ 振り返り

- ・子ども同士でブロックの取り合いになった。母親が仲立ちに入ってきたが、自分は何もできなかった。玩具を取られてしまった子どもへの対応として、他の玩具で代用できるか聞いてそれでも子どもが納得しない場合は、「順番だからね。次貸してもらおうか」と言葉がけすることを先輩からアドバイスされた。
- ・子どもの動きや声が聞こえたら、関わって欲しいがっていることを理解し、優しく声を返すことにした。子どもがどんなあそびに興味があるか知るため、様々な玩具をみせ、子どもに遊びを選ばせた。子どもが笑顔をみせた時、「すごいね、がんばったね」と声をかけ、拍手するなど共感する態度が大切だ。この一連の流れが理解できた。
- ・3回目になると、何度も準備、当日、片づけ、振り返り、改善という流れあることが理解できるようになり、焦る気持ちがなくなった。また、全体での振り返りで自分の持ち場とその他の関係性が分かってきた。親子、学生など沢山の人のダイナミックな集団に自分が参加できていると思うと喜びがある。

⑤ 改善

- ・ブロックの取り合いになってしまったときにどう対応を取るべきか考えたい。今回は「みんなでやろう」と声をかけてみることを考えた。ボールプールや滑り台には子どもが集まるが、ブロックには子どもがあまり来ないので、子どもの年齢発達に応じて、誘い掛けや話すスピード、子どもの目を引くような誘い掛けや環境設定をして呼び込みを改善したい。
- ・ままごとの遊びを展開していく際、好きな食べ物を用意してあげると遊びが広がる。子どもが切った野菜を手渡してくれた時は、「食べてもいい？」と聞くとやり取りになる。玩具を散らかしたまま他に行ってしまった場合は、いったん周りに落ちている足に引っかかりそうなものを片づけて、「一緒に片づけようか」と声をかけるといいと報告した。
- ・一人ひとりの関わり方の密度を上げるために、①名前を呼んであげる（名札をみる、保護者に聞く）②親子の関わり方（笑顔、声の大きさ、位置）を考える③玩具（子ども・親に聞いて）を選ぶ④親子両方に関わる⑤コーナー間の連携をする⑥子どもの安全（床・自動扉・エレベータ・玩具を確保する）。
- ・協働するとは、なにもしないでポツとしている時間をなくすこと。周りを見て動き、自分がスタッフの一員であることを理解することだと思った。

(4) 駐車場等（駐車場の警備・大学施設の案内）

5月

① 計画

- ・当日の服装（エプロン、名札、スニーカー、ジーンズ）などについて話し合う。
- ・担当者全員で大学内を回り、駐車場の場所確認をし合う。

② 準備

- ・駐車場への誘導は、言葉だけでは分かりにくいことが理解できたため、みんなで矢印を書いたブラカードをつくり、車を駐車する場所の説明がしやすいようにした。

③ 保育実践（5月27日）

- ・駐車場にきた人にはまず挨拶をした。歩く人に車が来たことを知らせた。第1駐車場に車が入らなくなる前に残りのスペースを素早く数え、車が路上で渋滞しないようにした。しかし、誘導する前に車を勝手に自分の好きな場所に止めてしまう保護者がおり、車が動きづらくなってしまったということもあった。

④ 振り返り

- ・車の誘導では、周りの様子を把握し、止められる場所を保護者に指示するなど、素早く対応しないと、他の車が動けなくなるということもあった。
- ・駐車場の担当者となったが、駐車場が広く、手順が理解できなかったため、動きながら仕事を理解することになった。とくに、2台連続で駐車場に入ってきた時の対応は難しかった。駐車場に入れず保護者を待たせたこともあった。

⑤ 改善

- ・一度、準備に積極的にに関わり、室内の子どもの様子を把握するなどする必要がある。
- ・安全に誘導することだけに頭がいてしまい、親子と話せなかった。親子に笑顔で挨拶し、言葉をかけたい。また、室内の様子がほとんど把握できなかった。

6月

① 計画

- ・駐車場は大学内に何カ所もあるため、入口に近い車のスペースが無くなったらすぐに状況を素早く確認し次を確保しなければならない。順番に上の方に誘導していくことグループでシミュレーションした。

② 準備

- ・消毒は、親子に毎回やらしてもらわなければならないので、いきなり声をかけないで、「きれいになろうね」と声をかけて消毒器に手を入れてもらうようにする。
- ・廊下には自動扉やエレベーターがあるので、危険から守るため、子どもの動きに注意する。

③ 保育実践（6月17日）

- ・前回の経験を踏まえ、事前に話し合い、車の入る台数を把握して、数えながらスムーズに駐車できるように配慮した。また、来てくれた親子に、元気な声で挨拶できるように心がけた。今回は先輩が都合で出られず、駐車場の担当者が少なかったため、とても心配になった。また、駐車場がすべて満車になってしまい、大学事務局職員と駐車場の安全の点検をした。職員との連携も大切であると感じた。
- ・駐車場では、最初は奥から順に車を詰めるように誘導した。ピークの時間に一度駐車場が混雑し、車から子どもが飛び出し、隣接する車と衝突する危険があった。一台分ずつスペースを空け停めてもらった。しかし、後の車の待ち時間が長くなってしまったため、より混雑してしまうこともあった。駐車場の入れ方は本当に大変だと思った。

④ 振り返り

- ・駐車場は一時に混むため、担当外の学生が手伝いに来てくれた。他部署の学生にも駐車場担当者として理解しておくことを伝えておくべきだと思った。

⑤ 改善

- ・当日、車の誘導がスムーズにいかなかったのはなぜか。①駐車場は炎天下の中動くので、帽子をかぶることや、体調管理を大事にする必要があった②駐車場に入る車の台数を完全に把握する必要があった。一時に混雑し、危険をはらんだ③駐車場で声をかけるが、うまく聞き取ってもらえなかった。楽しい雰囲気を出しジェスチャーだけでも読み取ってもらう、以上が次回の改善点であると考えた。

7月

① 計画

- ・広い駐車場では、声をかけても聞き取りにくいことがあるので、できるだけ大きな声で話す必要があること、見やすいように身振り手振りを使うことが大切だと話し合った。
- ・大学内には学生たち（『あちよぼ』に参加しない学生）が多く歩いているため、終了まで待たず、途中で駐車場から出る親たちにも安全に注意してもらうことを確認し合う。

② 準備

- ・駐車場の担当で、当日室内の様子をみるできないため、準備の段階で様々な室内外の様子を把握し確認し合った。
- ・朝、親子が来る前に、室内で手が空いていた学生と協力して道路の落ち葉を掃除し、親子を迎え入れる準備をした。

③ 保育実践（7月22日）

- ・駐車場は常に車が動いているので、子どもの動きには敏感になった。来てくれた親に挨拶したが、子どもが車の中で寝ていて、出てきたときも眠たそうにしていたため、声がかけれなかった。「おはよう」と声をかけられるとよかった。
- ・車から人が出てくる様子を見て、そこから離れた駐車スペースに案内しようと、危険なところに案内してしまった。しっかり安全を見守らなければならないと思った。グループでは、それぞれの持ち場で案内していたが、うまく情報伝達ができない場面もあった。

④ 振り返り

- ・駐車場担当3回目の実践で分かったことは、①駐車場では、親から先に話しかけ、一緒に来ている子どもを安心させること。②言葉だけでなく、笑顔で接することが大切である。言葉かけとしては、「楽しんでいてくださいね」が適切と感じた。
- ・帰りに室内から親子が出た時は、後ろから車が来ていないか注意し、安全に歩ける場所を確保する。車が後ろから来た場合は、すぐ親に知らせ、子どもの安全を確保してもらう。帰り際にも駐車場で感想など聞いて、挨拶することが大切であると確信した。

⑤ 改善

- ・子どもと関わるのを怖がらないで、大切な勉強の場として、もっと大胆に挑戦したい。
- ・駐車場担当ではない学生が助っ人に来てくれたため、仕事をうまくこなすことができた。他部署担当の学生の動きも全体の運営にかかわることがよく理解できた。

(5) 食堂・消毒（食堂の案内・消毒器〈手の消毒手伝い〉）

5月

① 計画

- ・入口消毒などの担当に決め、常に子どもの動きに注意を確認し廊下の自動扉やエレベーターの危険性をグループで確認した。

② 準備

- ・実際に消毒やエレベーター、自動扉の安全確認や、他の事前準備には積極的に参加した。
- ・手の消毒係のため、担当者が全員で消毒器具の設定と動作確認をした。

③ 保育実践（5月27日）

- ・入口では人数確認やパンフレットの配布などの仕事も加わった。また、お子様ランチのメニューの説明、消毒の担当と様々にすることがあった。

④ 振り返り

- ・子どもが親から離れてしまい、エレベーターの前に子どもが行ってしまうこともあった。初めてで対応に迷ったが、他のグループの学生の様子をみたり、聞いたりしながら、親子の誘導の仕方を学んだ。

⑤ 改善

- ・担当の仕事効率よく回せるように分担する。他のグループとも連携し、親子の誘導をスムーズにする。入口で親子に話しかけて仲良くなっておくことが大切だと感じた。親子と関わる際、親の方に注目したが、子どもと視線を合わせて話すべきだと思った。子どもに話しかけていると分かる挨拶をする。

6月

① 計画

- ・当日の服装（エプロン、名札、スニーカー、ジーンズ）などについて話し合う。

② 準備

- ・食堂の案内で、お子様ランチのメニューの写真を見せていたが、お子様ランチの値段が分かりにくかったため、値段を書いた紙を貼った。説明の仕方を確認し合った。

写真 11 保育実践 親子で手消毒



写真 12 保育実践 自動扉の危険を見守る



③ 保育実践（6月17日）

- ・冷房のためドアを閉め切りにした。ベビーカー使用の親のためにその都度ドアの開閉に危険に注意した。
- ・お子様ランチの案内の際、怪訝そうな顔を母親にされた。私は、お子様ランチを売るのでと思っていたが、案内目的は『「あちょぼ名物のランチ」はこんな種類がありますよ』と知らせることだと理解した。

④ 振り返り

- ・食堂案内でも立っているだけではなく、積極的に親子に関わりに行くこと、手の消毒を嫌がる子どもには、消毒が楽しくなるような声掛けが必要だったことを確認した。

⑤ 改善

- ・来場者が多く、入口の消毒器の前が混んでしまった。すんなり入れるように消毒器の数を増やし、混雑回避の案内役をつくることを提案した。

7月

① 計画

- ・食堂担当は、「今月のランチです」と親子に知らせる程度にする。無理やり入口で呼び止めると、子どもが遊びに入れないことを確認する。

② 準備

- ・消毒器の作動確認をする。消毒器を2台（小型1台追加）に増やした。

③ 保育実践（7月22日）

- ・消毒担当者3人の役割を確認した。入場人数係、消毒を呼びかける係、お子様ランチの説明係と3つに分けた。しかし、子どもが扉で怪我をしないように3人で見守った。気温が高くなってきたため、前回以上に消毒の呼びかけをした。
- ・参加した親子の人数が多く、年配夫婦の参加もあり、若い保護者だけでなく様々な世代を通しての子育て支援が伺えた。靴を履かないで戸外のおそびに走ってしまう子どもや、自動ドアに手をはさみそうな子ども、入口付近を駆け回ってラウンジから飛び出してくる子もいた。安全に十分気を付けた。

④ 振り返り

- ・入口付近にいる子どもに対し、①自動ドアやエレベーターのドアに注意しすぎて子どもの楽しみを妨げないこと②挨拶の後「大きい滑り台があるよ」など、遊びに興味をもてるような言葉かけをすること③消毒の際、子どもが無理なく楽しくできるように工夫すること。また、母親が消毒をしている時、子どもに危険がないように見守ること。母親が荷物や子どもを抱えている場合は手をかすこと④初めて参加する親子は緊張しているため、入り口でリラックスできる接し方をするなどを、全体の振り返りで確認した。

⑤ 改善

- ・子どもが怪我をする前に危険を予測して動くことが大切だと思った。子どもから少し目をそらした際に、エレベーターを使う学生にまぎれて入ろうとし、扉に手を挟みそうになるため、開閉せず扉を解放した方が危険を回避できると思った。しかし、危険と子どもの行動を制限しすぎないように注意することが必要だ。消毒器1台だけではなく2台を使用すると入口の混雑が防げたのではないかと話し合った。
- ・ランチの案内では、入口で話すため、あまり長く話すと後ろが詰まってしまうので、簡潔に案内するようにする。ランチの写真を見やすいようにして案内する工夫をする。

4. 考察

ここでは、科目「乳児保育」での保育実践を通しての学生の気づきから、学生の「協働」の内容を明確にするために便宜的に、(1)全体（受講生全員）での協働(2)グループ内（同じ担当場所）の協働(3)先輩（昨年「あちょぼ」に関わっている上級生）との協働(4)学生同士（同学年）との協働(5)その他との協働の5項目に分けて学生の学びの成果をまとめていくことにした。

(1) 全体での協働

①受付：親子に書類を書いてもらう場所である。学生とゆっくり座って接する場として、清潔な服装や髪形に気をつけ、挨拶することや、丁寧な言葉使いなどを学生全体で確認している。

また、月の催しものについても確認し、他コーナーとの連携を考えて行動した。そのため、受付の6月の目標には、「周り調整していくこと」を掲げている。さらに、アンケートの回収まで（入り口～出口までの全体把握する必要があること）という業務内容の理解をしていた。

②制作：7月、担当学生が車あそびに移動したことで、担当する人数が少なくなったが、その分の人数補充を他のコーナーの学生に声をかけ、支援してもらうことができるようになった。他の学生に遠慮や躊躇することは自分勝手な思いであることがわかった。

③遊具・玩具：3か月の学習の結果学生が、『協働とは、何もしないでぼやっとする時間をなくす

こと。周りを見て動き、自分がスタッフの一員であることを理解すること』と考察した。

④**駐車場等**：駐車場は開始時間前後30分位に大混雑するため、担当外の学生が手伝いに来てくれる。したがって、親子の危険を回避するためにも、他部署の学生にも駐車場案内を理解しておくべきだとわかったようだ。

⑤**食堂・消毒**：会場に入場する来場者が多くなると入口の消毒器前が混雑する。それを問題と考えた学生が、消毒器の台数を増やすことと、受付に誘導する案内役をつくと入口の混雑回避になると提案している。

全体の学生での協働での学びでは、自分の担当の把握はもちろんのこと、様々なコーナーに支援が必要になることを想定して、他のコーナーでの支援方法を理解しておく必要があることを気づいている。これは、保育実践全体の動きを把握することでもあると理解している。全体の把握を多くの学生がすることで、より安全な保育の保障がされることも分かったようだ。

(2) グループ内での協働

①**受付**：受付が一段落したあとに乳児コーナーに入った。しかし、どのように子どもに話しかけていいのかわからなかった。担当コーナーの他の学生の同じように戸惑う姿をみて1人だけではないと安心した。学生の記録には、ひとり迷うのではなく、「他学生が同じような点で悩むことがわかると安心する」との記述があった。他学生と同じ立場で悩むことが安心だと理解できた。

②**制作**：最初、準備の方法がわからなかった。担当グループの学生から話を聞いて、実際に動き、実践し準備を進めた。人の動きを実際に目にすることで支援方法を理解していったようだ。

グループで、学生を二人配置したが、子どもがいない時は声を掛け合って、不足したパーツを補充する係を作った。学生たちの話し合いで臨機応変に必要な係りをつくり、対応している。

④**遊具・玩具**：遊具での子どもとの遊び方を話し合ったり、子どもが楽しめる関わり方を検討したり、催しの流れを把握したりしている様子から、グループでのまとまりの強化がみて取れるようになってきた。

⑤**駐車場等**：・グループ全員で大学内を回り、駐車場の場所確認をし合った。駐車場は、開始前後一時に混雑するため、担当外の学生が手伝いに来てくれた。駐車場は広く、いくつかの場所に分散されているため、親子の危険が想定された。他場所の学生にも駐車場担当者として理解することを伝えておくべきだったと学生は振り返っている。

⑥**食堂・消毒**：入口付近にいる子どもに対し、①自動ドアやエレベーターのドアに注意しすぎて子どもの楽しみを妨げないこと②挨拶の後「大きい滑り台があるよ」など、遊びに興味をもてるような言葉かけをすること③消毒の際、子どもが無理なく楽しくできるように工夫すること。また、母親が消毒をしている時、子どもに危険がないか見守り母親が荷物や子どもを抱いている場合は手をかすこと④初めて参加する親子は緊張しているので、入口でリラックスして入れる接し方をすることなどを、全体の振り返りで確認したようだ。

グループでの単位の協働は担当場所が同じこともあり、相談や連絡など密に行っている。意外だっ

たのは、他の学生が親子への支援に戸惑う姿をみて安心していることである。自分ひとりで迷っているのではなく、「他学生が同じような点で悩むことがわかると安心する」と。何度も振り返りで話し合いをすると、一人の不安ではなく、同じ立場という安心感、また、連帯感も芽生えてきたようだ。

(3) 先輩との協働

①受付：人で混雑した受付を手順良く進める必要がある場合がある一方、人が来ない場合もあり、その際に、先輩に「玩具や滑り台をサポートして」と指導を受けている。席を外すときは、声をかけ合って業務をこなした。子どもへの声のかけ方は、先輩の声を真似しながら学んだ。その結果、この学生は、全体の様子を見て実践に参加することができたと感じている。

事前に、授業で先輩から段取りを聞いていたことや、グループで保護者にスムーズに書類を記入してもらう方法を話し合っていたことで安心して対応できた。また、言葉がけをしながら助け合う、協働をする。受付もチームワークが大切な仕事だと気づいている。

②制作：事前に催しの流れについて先輩から2つ指示があった。①リトミックや歌遊びは親子と一緒に参加すること②舞台周辺は子どもの危険がないように玩具を片づける。とくに、担当者だけに任せるのではなく、みんなで確認することが大切であることを助言されている。

③遊具・玩具：積み木のコーナーやままごとコーナー、乳児のコーナーで環境設定の段階で、子どもの目を引くように玩具を高く積んだり、ままごとの食材をおいしそうに並べたりするなど、先輩たちの工夫が、子どもの興味関心を引くということを知った。こうした工夫が子どもの興味を引き、遊びの導入につながることを理解している。先輩と一緒に玩具の並べ方をより一層工夫する姿がみられた。この学生が今後後輩に助言できるようになることも想定できた。

④駐車場等：学内全体の環境把握しない間に車の誘導をしてしまうと、即、親子に危険が伴う。駐車場とその周りの様子を把握し、安全に駐車できる所を保護者に素早く指示しないと、他の車が動けなくなるということもあることなど、先輩から指示され学んでいた。

⑤食堂・消毒：このコーナー担当は3名。①ランチメニュー案内②消毒③自動扉の安全確認④2つのカウンターを使い入場人数確認をするなど非常に多忙である。それに加え、地域の子育て支援雑誌を配布する業務も増えたことがあり、グループでの連携をさらに強くし対応していかなければならなくなった。

後輩学生にとって昨年『あちょぼ』を経験している先輩からの指示にたくましさを感じるようだ。優しく助言されたり、親子支援の仕方を真似たりすることで学年を超えた学生の関係の深まりを読み取ることができた。

(4) 学生同士の協働

①受付：親子への配慮として、①親子をみかけたら笑顔で「おはようございます」と挨拶し、親への丁寧な言葉使いを心掛けること②受付書類を手順に従って分かりやすく説明すること③親が受付

の書類を書く際に、子どもが不安にならないように見守ること、とくに、子どもには危険がないかをグループで確認し学び合っている。

②制作：制作コーナーに来た親子の人数が多くなった場合、加配の学生が必要になり、会全体の学生の様子を把握して助っ人にきてもらう必要があった。毎月の制作の内容を把握し、学生に手順を知らせ、親子への説明の仕方を教えていくことなどが大切な業務となった。

また、制作あそびでは、子どもに制作の完成度を求めるのではなく、子どもの好きな遊び方や好きな色を使ってつくる楽しさを味わうことが大事だということを、学生たちの関わりをみて学んでいる。また、子どものあそびの手助けしすぎないことをグループで確認し合っている。

③遊具・玩具：学生たちが、グループ全員で協力して授乳室の準備（マット敷き、ポット、机の移動、看板、布団出し）を行っている。子育てをしたことのない学生たちが試行錯誤しながら、授乳機の配置や、室内が外から見えないようにボードを置くなど、使用する母親の気持ちを考えながら、授乳に適した環境設定をしている。数人で考えることで授乳室の環境設定がスムーズにできたようだ。

④駐車場等：当日の朝、駐車場周辺に沢山の落ち葉が落ちていた。それに気づいた学生が、親子が来る前に掃き掃除しようと、担当の手が空いた学生を呼んで一緒に落ち葉を掃除していた。学生たちが掃除する姿から、親子を迎え入れる準備を自ら始めているという意欲がみられた。

⑤食堂・消毒：参加した親子の人数が多く、年配夫婦の参加もあり、若い保護者だけでなく様々な世代を通しての子育て支援の大切さに興味をもった学生たちであった。

学生同士では、試行錯誤して動こうとしている姿が随所にみられた。例えば、授乳室の設定には話し合いで授乳時の様子が外から見られないようにドアに目隠しを考えたり、『あちょぼ』当日の早朝、駐車場に落ち葉が落ちていたため、親子の足場をよくするために掃除をしたりと、それぞれの学生が考えて動けるようになってきた。同級生とは相談しやすいこともあるが、同級生だからこそ負けたくないというような気持ちもどこかにみられた。

(5) その他との協働

①受付：親子に笑顔で話しかけている学生をみて、笑顔は人と関わるに大切なものと感じている。「足元のマットが浮いていると子どもが転んでしまう」という先輩の話から、安全を考慮しながら、子どもの遊べる環境づくりを行うことが重要だと気づいている。先輩の言葉は学生の気持ちにそっと入っていくようだ。

アンケートについては、学生自身が、ペンを持って行って親に直接声をかけることで回収率が上がるのではないと考えている。回収率が上がることで、親子の『あちょぼ』への要望を知ることができる。保護者の本音を理解することも『あちょぼ』には重要だと分かったようだ。

②制作：親子の中に、幼児の兄と0歳児の弟の2人を連れているお母さんが、スタンプ遊びに参加していた。その際は、お母さんの目はスタンプ遊びに夢中になっているお兄ちゃんの方に集中してしまっていた。その時、学生は、赤ちゃんを見守らないと使命感を感じたようだ。

③遊具・玩具：保護者にどう話しかけてよいか分からず不安だった学生が、保護者と話す中で、「うちの子は〇〇で遊ぶの」と教えてもらった。さらに、子育ての不安や大変さも聞かせてもらった。帰りに保護者から「ありがとう。また来月きますね」と声をかけられ、次回は十分に関わろうと意欲がわいてきたようだ。母親とのコミュニケーションが自信に繋がったようだ。

戸外での乗り物あそびコーナーで、遊んでいる子どもの体温が高く感じたので、看護師に伝え、窓際につれていってもらい休ませた。体調の悪い子どもの対応方法を学んだ。戸外での乗り物遊びのグループは看護師との協働を学んだようである。

④駐車場等：7月になると、駐車場担当は、朝始まる前の親子の安全確認が大切なだけでなく、帰りの安全確認も重要業務なことを理解し始めた。親子が室内か出てきた時、背後から車が来ていないか確認し、安全に歩ける場所を確保することが必要であることに気づいた。車が後ろから来たことがわかった場合は、すぐ親に知らせ子どもの安全確保してもらうことや、帰り際に自分たち学生が感想を聞いたり挨拶したりすることが大切であると確信したようだ。

⑤食堂・消毒：「冷房のためドアを閉め切りにしたい」と学生グループで相談していたが、現実にはベビーカー使用している親がいたため、その都度自動扉の開閉に危険に注意しなければならなくなってしまった。混雑した入口の扉を安全にするために、保護者に協力を求め入口の消毒を手早く済ませてもらうようにした。保護者との協働が安全には不可欠なことに気づいた。

その他との連携については、学生たちは保護者との連携を強く感じている。とくに、駐車場担当や入口にいる担当者（食堂・消毒）たちは、保護者に子どもの様子を把握してもらってこそ安全な『あちょぼ』が開催できると身をもって体験している。

また、アンケートについては、「親から直接分たちで集めてでも回収率をあげたい」と願っているようだ。振り返りでアンケートの集計結果を公表するが、学生たちは、結果の一つ一つを真摯に受け止めている。自分たちの『あちょぼ』の質を向上させたいと考えているようだ。

5. まとめ

『あちょぼ』での学生実践をみていると、「協働」は実践の中で自然に身について行っていると見て取れた。とくに、学生自身が先輩、同学年、後輩と意識しながら保育実践をしていることがわかった。特記すべきは、実践中に先輩学生から助言されことを真摯に受け止め自分の中で理解し、次にそれを同学年に情報として伝えていることである。また、同学年では、一緒に支援方法を学んで成長していくことを楽しむ様子が見られた。

保護者との連携でも安全面中心にする必要を感じている。子どもを見ていても子どもだけでなく、親の動きを把握していないと危険なことがあることを理解している。学生たちは、保護者にも協力してもらい子どもの安全を確保して『あちょぼ』を成功させたいと願いながら実践をしていることも伺えた。

したがって、学生の「乳児保育」での『協働』の学びの成果は十分あったといえる。

引用・参考文献

- 1) 「実践的学習を取り入れた『乳児保育』についての試み」, 永田恵実子・木村映子・三條美和著, 静岡英和学院大学紀要第 11 号 p 143 - 181, 2013
- 2) 「保育士養成課程等の改定について(中間まとめ)」, 『保育士養成課程等検討会』, 2010, 3. 24
- 3) 『『保育実務研修』における成果①』, 永田恵実子著, 『日本保育学会第 63 回大会発表要旨集』, 2010, p696.
- 4) 『『保育実務研修』における成果②-学生の自己評価から-』, 茂木七香・永田恵実子・矢田貝真一著『日本保育学会第 63 回大会発表要旨集』, 2010, p697.
- 5) 「実践的指導力育成をめざす『保育実務研修』についての考察(1) - 3 年制保育者養成課程における科目としての成果と課題 -」, 矢田貝真一・永田恵実子著, 『大垣女子短期大学紀要第 51 号』, 2010, p49-60.
- 6) 『改訂新版資料でわかる乳児保育新時代』, 乳児保育研究会編, ひとなる書房, 2010, P10-167.
- 7) 『新時代の保育双書乳児保育』. 大橋君子編著, みらい, 2009, p51-77.
- 8) 「全国保育士養成協議会専門委員会: 保育士養成システムのパラダイム転換 I ~ III」, 『保育士養成資料集第 44 号, 46 号, 48 号』, 2006, 2007, 2008.
- 9) 「保育者の実践力に関する研究-遊びと交流活動との関係から-」, 清水一巳著, 『名古屋女子大学紀要第 55 (人・社) 号』, 2009, p89-102.
- 10) 「子どもを取り巻く環境の変化を踏まえた今後の幼児教育の在り方について-子どもの最善の利益のために幼児教育を考える-(中央教育審議会答申)」『文部科学省』, 2005.
- 11) CHS 子育て文化研究所『見る・考える・創り出す乳児保育 養成校と保育室をつなぐ理論と実践』萌文書林, 1999.
- 12) 『最新保育テキストブック 5 <保育実習>』 4 岡本美智子編著, 聖公会出版, 2007.
- 13) 『保育者のための文章作成ワークブック』. 谷川裕捻編著, 明治図書出版, 2006, p96-113.
- 14) 『知りたいときにすぐわかる幼稚園・保育所・児童福祉施設実習ガイド』, 石橋裕子編著, 同文書院, 2011.
- 15) 滋賀県米原市社会福祉法人大原福祉会大原保育園: <http://www.ans.co.jp/n/ohara/>

(本論文は、平成 25 年度「乳児保育 I」の受講学生 36 名の協力を得てまとめ報告したものである。)

